

●中学生の部

日本動物福祉協会一等賞 米丸 泰地 よねまる たいち
「保護犬のぬくと出会いと別れ」

「お母さん、ぬくちゃんを病院へ連れて行くから、先におうちに戻ってね！」と言うと、母はうちで飼っているチワワのぬくを抱っこして動物病院へ走って行きました。その日、肺炎の治療を終えたぬくを病院から抱っこして帰り、帰り道の公園で少し下ろしたところで突然、ぬくは倒れてしまいました。

ぬくは保護犬です。ぬくと出会う前に二匹のチワワを飼っていました。その二匹は親子で、僕が生まれる前からいました。一匹は、十二才の時に心臓の病気で亡くなり、もう一匹は、膀胱がんで僕の腕の中で息を引き取りました。十五才でした。とても悲しくてたくさん泣きました。でも、しっかり最期までお世話をしてお別れをすることができました。

しばらく経ち、「多頭飼育崩壊」「レスキュー」「保護犬」のニュースを偶然見ました。こんな所で子犬を生ませる道具になっているなんて、と僕は体がこわばってしまいました。そのニュースをきっかけに、家族で保護犬の話題が増えました。

ある時、ブリーダー崩壊現場から七十頭以上の犬がレスキューされた事を知りました。たくさんの犬が何年も狭くて不衛生なゲージに入れられ、自由がありません。その中にいたぬくの写真は、やせていて汚くて怯えた表情でした。子犬を何匹生んだのだろう。生んだ子犬とはいつまで一緒に過ごせたのだろう。レスキュー後、保護団体の所にいたぬくは、約十才と老犬でなかなか新しい家族が見つからないようでした。僕は、年ではなく、ぬくと楽しく一緒に過ごしたいと思いました。それに僕は、前のチワワをしっかりと最期までお世話したので、年を取った犬でも面倒を見る自信がありました。

うちにやって来たぬくは、目が不自由で、歯が一本も無く、腰が曲がっていました。それでも、十年以上も外に出たことが無かったぬくが、庭を楽しそうに歩いているのを見るだけで嬉しかったです。土の匂い、歩く感触はどんな気持ちだったのか、ぬくを見ているだけで家族皆の笑顔がこぼれました。

元気そうに見えても体の中は弱っていて肺炎になりました。かかりつけの動物病院で入院をしたり、退院しても家で安静が続きましたが、一か月半掛かってようやくもう大丈夫と言われ、母と一緒に帰ったあの日、僕がリードを持っていると、突然倒れました。

母が走って病院へ戻り、僕も後を追いかけると、救急室で口の中に管が入り、心臓マッサージをされていました。何度も名前を呼びましたが、ぬくの心臓は動きません。逆に僕の心臓はドキドキと速くて苦しかったです。

長い間狭い場所で過ごしたために血の塊ができていて、それが心臓に飛んでしまった可能性があるとのことでした。

ぬくは保護されてから八ヶ月で空に行きました。少しの間しか一緒に暮らせなかったけど、ぬくは僕達を家族と感じてくれていたのでしょうか。とても大切にしていました。もう二度と会えないのは分かっていますが、会いたいです。空で幸せでいて欲しいです。

身近な動物だけでなく、テレビや動物雑誌からは野生動物は密猟でたくさんの動物が人間によって苦しめられていることも知りました。地球は人間のものだけではありません。どの生き物も平和に暮らせるようになればいいな、と強く思います。

僕は病気で苦しむ動物や悲しい思いをする飼い主さんが減るように研究をしながら、ぬくのように居場所が辛く生きていることに苦しんでいる動物達を救える獣医師になります。今できることは、可愛いと皆が見ている動物達の裏にある現実を知り、しっかり考えることです。たまたま犬に生まれてきただけで、命の重さは人間と同じです。簡単に消えて良い命は一つもありません。獣医師になる為に勉強を頑張っていきたいと思います。